

未来を花束にして SUFFRAGETTE -



フィルムフェスタ

日本語字幕付き映画上映会

ねりまフォーラム

2022

男女共同参画の集い

© Pathe Productions Limited, Channel Four Television Corporation and The British Film Institute 2015. All rights reserved.

令和4年11月19日(土) 練馬区立生涯学習センター

主催 練馬区 企画・運営 ねりまフォーラム実行委員会

『未来を花束にして』

運命も世界をも自らの手で変えてゆく

これは、真実に基づいた、勇気ある女性の物語。



STORY

1912年、ロンドン。劣悪な環境の洗濯工場で働くモードは、同じ職場の夫サニーと幼い息子ジョージの3人で暮らしている。

ある日、洗濯物を届ける途中でモードが洋品店のショーウィンドウをのぞき込んでいると、いきなりガラスに石が投げ込まれる。女性参政権運動を展開するWSPU（女性社会政治同盟）の"行動"の現場にぶつかったのだ。それが彼女と"サフラジェット"との出会いだった。

同じ頃、女性参政権運動への取り締まりが強化され、アイルランドでテロ対策に辣腕をふるったスティード警部が赴任してくる。彼は歴史上初となるカメラによる市民監視システムを導入し、無関係だったモードもターゲットの1人として認識されてしまう。

やがてモードに大きな転機が訪れる。下院の公聴会で証言をすることになったのだ。工場での待遇や身の上を語る経験を通して、初めて彼女は"違う生き方を望んでいる自分"を発見する。けれども法律改正の願いは届かず、デモに参加した大勢の女性が警官に殴打され、逮捕された。そんな彼女たちを励ましたのが、WSPUのカリスマ的リーダーであるエメリン・パンクハーストの演説だった。

© Pathe Productions Limited, Channel Four Television Corporation and The British Film Institute 2015. All rights reserved.

CHARACTER

モード・ワッツ・・・主人公 洗濯工場勤務

サニー・ワッツ・・・モードの夫

イーディス・エリン・・・WSPUの活動家。夫が経営する薬局で診察を行っている

バイオレット・ミラー・・・モードと同じ洗濯工場で働く活動家の女性

エメリン・パンクハースト・・・WSPUのリーダー

エミリー・ワイルディング・デイヴィソン・・・強い信念を持った女性活動家

命と引き換えに女性の参政権を訴え世論を動かす

アーサー・スティード警部・・・WSPUの活動を取り締まる警部

ホートン議員・ホートン夫人・・・夫は議員、妻(夫人)はWSPUの支持者

年	国	年	国
1893	ニュージーランド	1945	イタリア
1902	オーストラリア	1945	日本
1913	ノルウェー	1949	中国・インド
1917	ロシア	1953	メキシコ
1918	イギリス・オーストリア ドイツ・ポーランド	1971	スイス
1920	アメリカ	1974	ジョーダン
1932	ブラジル	1976	カタール
1934	トルコ	2003	カタール
1944	フランス	2015	サウジアラビア

『女性参政権の歴史』

(映画参考)

昭和20(1945)年12月に衆議院議員選挙法が改正され、昭和21(1946)年4月10日に、我が国で女性が初めて参政権を行使しました。

約1,380万人の女性が初めて投票し、39名の女性国会議員が誕生しました。これを記念して、「4月10日」が「女性の日」とされています。

練馬区役所でも毎年この時期に、女性活躍推進をテーマにパネル展を実施しています。

サフラジェットたちが変えたもの

映画『未来を花束にして』(原題サフラジェット)に寄せて

大東文化大学社会学部教授 山口 みどり

1860年代半ば以降、女性への参政権拡大を求める女性参政権論者(サフラジスト)たちは、議会への請願やロビー活動、さまざまな啓発活動を通してその必要を訴えました。このころ、女性たちは高等教育に参入し、女性の知性が男性に劣らない証を立てました。女性の医師も誕生します。一方、男性の参政権は段階的に拡大され、19世紀末にはすでに労働者も含め成人男性の7分の5に選挙権が与えられていました。しかし数十年にも及ぶ懸命な運動にもかかわらず、女性への参政権拡大は一向に認められません。そもそも多くの人は女性参政権に無関心だったのです。

こうした状況を打開したのが1903年に設立された女性社会政治連合(WSPU)でした。エメリン・パンクハースト夫人率いるWSPUは、「言葉ではなく行動を Deeds not Words」を合言葉に、女性参政権問題に人びとの関心を向けさせようと、より目立つ運動を始めたのです。シンボル・カラーの緑・白・紫を配したバナーやメダル、パレードに野外劇(ページェント)。でもそれだけではありません。世間を驚かせたその運動手法により、彼女たちはそれまでの「女性参政権論者(サフラジスト)」たちとは区別されて「女参政権論者(サフラジェット)」と呼ばれるようになります。

権利を求める女性をあざ笑う男性たちに注目してください。当時の「当たり前」が見えてきます。伝統的なイギリス女性の理想像は、19世紀に流行った「家庭の天使」という詩のタイトルに表れています。夫を癒す妻をけがれなき「天使」と称える詩ですが、そこには、やっかいな「善意的性差別」が埋め込まれています。無私の愛で家族に尽くす女性を表面的には賞賛しながら、同時に男性の力で「守ってあげる」必要のある弱く無能な存在と位置づけているのです。もちろん、天下国家を論じるのは男の仕事であり、「女子ども」はそのようなことは考えなくてよい、ということです。そうしたまなざしは、制度のなかにもしっかりと組み込まれていました。参政権はおろか、妻には子どもの親権はなく、その財産は特別な手続きをとらない限り持参金も含め夫のもの。そして、夫には妻を「懲らしめる」権利さえあるとされていたのです。労働者の世界では、既婚女性も家庭外に出て働き、稼ぎを得ていますので、それだけに夫のメンツは、妻を従わせる力と結びついていました。

WSPUは、中流階級中心であった他の参政権団体とは異なり、労働者階級の女性も多数加わったことで知られています。伯爵令嬢から女工まで、階級を超えて手を握った彼女たちは、女性を縛り権利を与えない社会への怒りを露わにし、政府を翻弄し、力強くしたたかに男性と平等の権利を求めていきます。それは当時の女性像を打ち壊す運動でした。



山口みどり氏 プロフィール

大東文化大学社会学部教授

英国国立エセックス大学社会学部大学院博士課程修了(PhD)

主著: Midori Yamaguchi. 2014. *Daughters of the Anglican Clergy: Religion, Gender and Identity in Victorian England*, London: Palgrave Macmillan.

「アラクニーの娘たち 『マンスリー・パケット』誌の参政権論争に見る参政権意識の「大衆化」」『史潮』91号、2022年6月。

◎実行委員会注：日本の時代背景

<江戸時代 1603年～1868年>1860年「桜田門外の変」、1867年「大政奉還」、1868年「戊辰戦争」

<明治時代 1868年～1912年>1868年「明治維新、五箇条の御誓文」、1871年「廃藩置県」、1877年「西南戦争」、

1889年「大日本帝国憲法の発布」、1894年「日清戦争開始」、1904年「日露戦争開始」、1912年「明治天皇没」 大正時代へ

<大正時代 1912年～1926年>1914年「第一次世界大戦開始」、1925年「治安維持法、普通選挙法(25歳以上成人男子)」

『未来を花束にして』を観て 私たちが考え、未来に託したいこと

当たり前を疑ってみませんか

映画内では、女であるというだけで、労働力としても性的にも搾取され、道具のように扱われていました。女性の参政権なんて、何言っているの？という“当たり前”。

この“当たり前”を疑って、“気づく”ということが最初の一步になるのではないのでしょうか。

「男だから」、「女だから」、〇〇するべき、普通は〇〇だ……現在でも多くの“当たり前”が溢れています。

“当たり前”でも、おかしいと思ったことには声をあげてみましょう。

「あなたの一票」について考えてみませんか

今、当たり前のように女性も選挙に一票を投じ、個人の意思表示をすることが出来ます。18歳になれば、社会の構成員としての一票を投じ、意思表示をすることができます。これは、先人たちが勝ち取ってきた結果です。

一票じゃ、なにも変わらないと思うかもしれませんが、その一票の集まりで社会は決められます。

投票はあなたの声です。それは、届けるべき声です。(出典:VOICE PROJECT)

VOICE PROJECT…政党や企業に関わりのない、市民による自主制作プロジェクト

政治分野の女性参画について

日本は政治分野の男女格差が世界で、139位です。(出典:ジェンダーギャップ指数2022)これは、国会議員(衆議院議員)の女性割合、大臣の女性割合がいずれも低く、過去に女性首相が誕生していないことも低評価につながっています。

支持政党や選挙区の候補者に女性がどれほど含まれているか意識してみてくださいませんか。

先人たちのおかげで今の自分たちがいることを忘れないで生きたい。
そして、100年後の人たちに何かを残せるように生きたい。

- ・映画を観て感じたこと、家族や友人に伝えてみる
- ・普段の生活でも気になったこと、疑問に思ったことは身近な人との話題にしてみる
- ・他人事から自分事にして考えてみる

まずはこんなことから
始めてみませんか？

男女平等意識が広がり、すべての人が輝ける、そんな社会を目指していきましょう。